

## 2016年度教師海外研修(エチオピア) 研修報告書

学校名	弥富市立弥富北中学校	氏名	近藤 勝士
-----	------------	----	-------

### <印象に残る写真2点>

#### ●写真1 [5506]

子どもたちの笑顔は世界共通！

ボンガにあるバルタ小学校訪問。みんなで撮った1枚。温かい歓迎を受けました。何にでも興味をもって意欲的に活動する子どもたち。世界中の人々が平等な機会を与えられるような世界になっていきますように！



#### ●写真2 [6029]

エチオピアの空に向かって

コーヒー発祥の地、カファ地方、ボンガでの1枚。夕日が照らす中、石畳の道を歩いていて綺麗だなと思わず撮った1枚。「空は、世界中とつながっている。」と実感した。



## 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

この現地研修に参加して、自分の考え方や価値観に変化が生まれた。参加する前は、開発途上国には先進国である私たちが支援してあげなければという思いが心の中にあった。しかし、エチオピアの人々、活躍する日本人の方々との出会いや数々の研修を通して、支援するのではなく、お互いに課題や改善点があり、共に考え乗り越えていくのだという考え方に変わった。物質的には確かに先進国である日本の方が豊かである。しかし、心の豊かさはどうかというと、エチオピアの人々の方が豊かかもしれない。どんな状況であろうと、それぞれに課題や改善点があることを改めて感じた。私は、日本で日々接している目の前の子どもたちの成長を促すきっかけをつかみたいという思いでこの研修に参加した。自分が見たこと、感じたこと、経験したことを通して、子どもたちの成長を促す題材を数多く手に入れることができた。今後の教育活動において、最大限活用していきたい。

## 2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

### **(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から**

「日本人に似ているエチオピア人」 こう感じる事ができたということは、エチオピアに肯定的に出会う事ができたと思う。事前に書籍やインターネットで調べた情報で、お辞儀する文化があり、コーヒーセレモニーなどのおもてなしの文化があり、目上の人を敬う文化もあるということを知った。そして、実際にエチオピアに行き、人々と接したり、街の様子を見たり、いろいろな話を聞いたりしていくことで、日本人に似てシャイな人が多いこと、遠まわしな表現が好きなことなどの共通点も見つかった。また、エチオピア人は、時間にルーズでアバウト、約束は反故されるのが当たり前という青年海外協力隊の方々のお話を伺った。研修の中でもそうした場面が実際に見られた。一見、良くないところに思えるが、それは仕事よりも家族や友達を大切に考えるという考え方をもっているからだという話を聞き、肯定的に捉える事ができた。どんな事柄も、肯定的に捉えようとする気持ちが大切であることを改めて実感した。

### **(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から**

今回の研修で多くの日本人がエチオピアにおいて活躍していることを知り、日本とのつながりを感じる事ができた。現在、エチオピアでは過去 10 年連続で、毎年約 10%の経済成長を続けている。その背景には、中国の経済的な支援が大きいが、日本も JICA の支援を中心に、人を育てるという視点で草の根の支援を続けている。エチオピアカイゼン機構 (EKI) のマッコネン副所長からは、日本の「カイゼン」という言葉がエチオピア政府や企業の中にも浸透しており、幼児教育から大学教育までのカイゼンを意識したカリキュラムの作成中であるというお話をお伺いした。今日よりも明日へという考え方や気持ちを育てようとしているというお話に感銘を受けた。また、いくつかの学校を訪問させていただいて共通して感じたことは、子どもたちの素直さ、好奇心、人懐っこさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさは世界共通だということである。やはり、世界を支え、変えていくのは教育だと感じた。

### **(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から**

今回の研修を通して、幸せとは何かということを深く考えさせられた。私自身、「幸せですか？」と聞かれたら、迷わず幸せだと答える。何故なら、日本という恵まれた環境に身を置き、物質的にも恵まれ、何より毎日子どもたちを前に授業ができるからだ。エチオピアの人々も「幸せですか？」という問いに対して、多くの人が幸せと答える。物質的には決して恵まれているわけではないのが、大切な家族や友達がいるからだという理由だ。やはり、人と人との繋がりが大切だと感じる。また、人それぞれ幸せの感じ方は違う。決して正解はないという視点で支援の仕方などを考える必要があると思う。押し付けやお節介にならないように、お互いのニーズや本当に必要なのかを考えながら支援をしていかなくてはならない。世界の国々がお互いの文化や誇りは尊重し、お互いの良いところを学び合い、共によりよく幸せになっていくことを真剣に考えながら、行動していく事が大切であると強く感じた。

## **3. JICA の国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」**

付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクトのような事業の仕組みが特に良いと思った。森林の管理を居住する住民に任せ、輸出したコーヒーに付加価値をつけて、売れたらその利益を住民に還元することで、森林保全と生計向上を同時に支援できる仕組みは素晴らしいと思う。目に見える支援を行うだけではなく、その後も現地の人たちが自分たちでやっていけるという自立発展性を意識しているのが JICA の支援である。長期的な視点の支援となるので、結果は目に見えにくいものとなるが、本当に必要なことだと思う。ただし、中国の支援のような目に見えての支援も必要であり、今後あるといいなという視点だと思う。また、インジェラに使われるテフ粉が鉄分を多く含むグルテンフリーであることから、先進国でも売れる食品開発やハイランドレーザを使った商品開発などに専門家やデザイナーの派遣をより積極的に行うことも行っていくと良いので

はないかと思う。

#### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

##### ① JICA エチオピア事務所（所長面談、理数科教育アドバイザー説明）【加藤／近藤】

神公明所長よりエチオピアの国について、エチオピアの現状や課題について話を伺うことができた。エチオピアは、アフリカの中で唯一植民地化されてこなかった国であり、自分たちの文化に誇りをもち、周りからの影響を受けにくい国である。また、エチオピア人は、親しくなるまでに時間がかかり、人見知り、間接的な表現を好むなど日本人に似た部分が多くある。一方で、2015年の選挙では、国会議員の議席を与党がすべてとり、一党独裁体制になっていることなどの課題もあることも知ることができた。

理数科教育アドバイザーの宮崎岳さんから話を伺った。農業だけではなく工業に力を入れていくために理数科教育に力を入れており、SMASEE（スマッセ）というアフリカにおける理数科ネットワークやLAMSプロジェクトにより、教育の質や教員の地位も向上してきている。課題としては、小学校の就学率は高くなったが、5グレード以降に4割程の子がドロップアウトすることなどがあげられる。日本のJICAの草の根の支援が幅広くエチオピアで浸透してきていることも感じた。（近藤勝士）

##### ② アディスアベバの青年海外協力隊とのワークショップ【近藤／鈴木】

青年海外協力隊の6人の方々とワークショップでは、それぞれのエチオピアのおすすめやエチオピアに来て困ったことを知ることができた。おすすめは、コーヒーはもちろんビールがおいしくて安いことや革製品の質がよいこと。自然が多く過ごしやすい気候やダンスの足や首の動きがすごいことなどを教えていただいた。困ったことは、ダニが多いことやスリやセクハラが多いこと、言葉の面や時間にルーズであることなどであった。また、日本の子どもたちに考えてほしい、学んでほしいことについて青年海外協力隊の方々と共に考えた。世界を見ることで、日本の常識と世界の常識が違うことを知ってほしい、日本が恵まれていることを感じてほしい、幸せや豊かさとは何かを考えてほしい、外見や宗教などに関係なくみんな同じ人間であることを知ってほしい、ハングリー精神をもってほしい、違いを楽しめる人になってほしいなどの意見が出た。ワークショップを通して、改めて教育について考えることができた。（近藤勝士）

##### ⑬ ギンボ高校訪問+⑭ バルタ小学校訪問（子どもとの交流）【近藤／鈴木】

ギンボ高校訪問では、エチオピアの教育の課題を知ることができた。施設面がよくないこと、図書室の蔵書が充実していないこと、教材が足りていないので先生自身がちゃんとした教育を受けていないことなどがエチオピアの学校の共通の課題として挙げられる。また、地方の学校では、20～30キロ歩かないと学校に通えず、遠すぎて通えなくなる子がいることや、女の子は登校途中で性暴力被害に遭うことがあったり、家庭が学校へ子どもを送り出すという考え方が薄かったりすることなどが課題である。意外だったのは、心理カウンセラーが配属されており、うつ病の相談や恋愛の相談があるという話を伺い、日本と同じであることを感じた。

バルタ小学校訪問では、素晴らしい歌とダンスの歓迎を受け、花束までもらい感激した。その後、ソーラン節を披露し、折り紙や大縄跳びやビーチバレーなどで交流を行った。子どもたちの純粋に楽しむ笑顔に思わずこちらも笑顔になった。子どもたちの笑顔の素晴らしさは世界共通だと改めて感じた瞬間であった。（近藤勝士）

##### ⑮ 青年海外協力隊（服飾）活動／生産性向上センター【吉田／近藤】

生産性向上センターを訪問し、青年海外協力隊の佐藤恵利さんから話を伺った。このセンターは服飾関係の仕事をするために研修を受ける場所で、市役所に申請をすれば、2週間の研修を無料で受けられ、材料費も政

府から援助してもらえます。1か月や3か月のコースもあり、難しい技術も学べるが、有料となる。10代～50代まで幅広い年齢層の女性が通っており、実際に14歳の学生が休みを利用して研修を受けていた。その子に話を聞くと、「将来はデザイナーになりたい。」「デザインをしているときが楽しい。」と答えていた。自分の将来のことを考えて、休みを利用して技術を身につけようとする意欲や姿勢に感銘を受けた。(近藤勝士)

## 5. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・エチオピアは、ダニスプレーは必需品。1本使い切りました。
- ・お腹を下す可能性は高いので風邪薬や胃腸薬や百草丸や下痢止めなど持っていくべきです。
- ・お土産用に渡せるものを(100均でいいものたくさんあります。)個人的にいくつも持っているといいと思います。
- ・日本の様子をA4で印刷して、クリアファイルに入れて持ち歩いているといいです。いつでも日本のことを紹介できます。
- ・エチオピアの服装は、日中は天気が良いければ、半袖1枚でも大丈夫です。朝晩は冷えますので、ライトダウンや長袖パーカーなどがよいと思います。雨は突然降ってきます。雨具は常に持ち歩けるようにしておいた方が良いでしょう。
- ・エチオピアは、断水・停電が当たり前。地方に行った際のホテルでは、水は使えずトイレは汲んだ水で流し、停電ではないけどトイレの電気はつきませんでした。それが良い経験となりました。
- ・事前学習はしすぎてしすぎることはありません。時間のある限り準備していくといいと思います。
- ・エチオピアの公用語アムハラ語は、挨拶は、「サラムノウ」を覚えておくとよいです。直訳は「幸せです」ですが、挨拶としていつでもどこでも使えます。ありがとう「アムセグナッロウ」も使えます。

## 6. その他全般を通じての感想・意見など

海外研修を通して、得られる経験は一生の宝物です。自分の人としての幅を広げてくれる研修となりました。研修を終えて、今後も日本で教員として目の前の子どもたちと向き合い、自ら考え、自ら行動していける力を育みたい。多様な視点で物事を捉え、多様な考え方を受け入れることができる人を育てていきたいと改めて感じます。教育が世界を支え、世界を変えていくと信じて、自分のできることを最大限していきたいと思います。すべてに感謝しています。本当にありがとうございました。

以上